Akny
天の岩戸伝説
思兼
おもいかね
泡蔵
AWAZO

イントロダクション …… 4
ドリームキャッチャー …… 15
恵利原の水穴 …… 37
彷徨える夢 …… 67
能力開発 …… 99
とまらぬ性 …… 135
天岩戸伝説 …… 163
あとがき …… 194

イントロダクション

天空どこまでも続く闇の中に月だけがポッカリと丸く輝いていた。
これだけ闇深い空だと言うのに星はどこを探しても見あたらず、まるで墨汁をこぼしてしまったかのように夜空を漆黒に塗りつぶしている。
そんな怪しげな夜空を見上げる余裕もなく、男は一人森の中を走り続けていた。
わずかに届く月明かりが深い森をぼんやりと照らし出しているが、そこは闇と言っても過言ではないだろう。
これだけ視界が悪いと言うのに、男はスピードを緩めようとせず走り続けている。時折足を取られ転倒してしまいそうになるのだが奇跡的に転ばず足を動かし続けていた。
しかし、何故こんな危険をおかしてまで走り続けるのだろう。
必死に森を走り抜ける男の顔には僅かに恐怖の色が浮かんでいた。その表情だけを見るならば、何者かに追われ逃げているようにも見える。だから男は危険を冒してまで止まることなく必死で走り続けているのだろうか……
「ハアハアハアハアハアハア」
男の息づかいだけが森に響いていた。いったい何に追いかけられているのだろうか、いったいどこまで逃げればいいのだろうか……
しかし、男が必死に走り続けているにもかかわらず、森はいくら進んでも景色を変えようとはしなかった。それとも方向感覚が狂い同じところを回ってしまっているのだろうか。いや、方向感覚に狂いは生じていない、森が深すぎるのだ。これ程深い森がいったいどこに存在するのだろう……そんな疑問も持たず男はただ走り続けている。
異常な森を一人で走り続ける男。しかし、この男もまた異常であった。男は何時間も走り続けているのにスピードが衰える様子がない。それどころか疲れすら感じていない様子だ。

「ハアハアハアハアハア」

乱れることのない一定のリズムを刻んだ呼吸音が森の中に木霊する。人間離れした体力が男に備わっているのだろうか？　別段鍛え抜いた躰を持っているわけではない、それなのに何故これ程のことができるのだろうか。

男は自分が走っていることに今気が付いたように視線を走らせる。

――また同じ夢だ……

そう、男は夢の中を疾走しているのだった。

自分が夢だと認識できる夢、何ヶ月にわたり見続けている同じ夢、どこまで行っても抜けることのできない森の中を走り続ける夢……

――俺はいつまで走り続けるんだ……

何故走り続けているのか自分でもわからない。何度も走るのを止めようと思った。しかし止めることはできなかった。なにかに追いかけられているのか？　確かに背後からは殺気のようなものが感じられる。それはまるで鋭利な刃物を背中に突きつけられているような冷たい恐怖に似ていた。いったいなにが追いかけてくるのだろうか？　しかし振り返る勇気がない。いや、背後を確認した途端自分がなくなってしまうような感覚が振り返ることを拒んでいる。

――走り続けなくては……もっと早く……

何度も消えては浮かぶ疑問も最終的には走り続けると言う答えをはじき出してしまう。しかし、いったいここはどこなのだろうか？　草を掻き分け木をよけながら道なき道を走っているのはかなり疲れる。いや体力的問題ではない。肉体の疲れは全く感じていないのだから……しかし精神的に参ってしまう。

それでも男は走り続けた。時折聞こえてくる声に導かれて……

『こちらへ……もう少しです……』

美しい女の声が再び聞こえてきた。その声は目の前にある闇から聞こえてくる。だから男は真っ直ぐに走り続けているのだろうか？

――俺の目指している場所はそこなのか……

何ヶ月もかけて女の声が導く場所へ辿り着こうとしているのだろうか？　男にはわからなかった。

それでも走り続けるしかない……

殺気から逃れるために……

そこに着けば安らぎがあると信じて……

そんなことを考えていた時、目の前に僅かな光が見えてきた。今まで何ヶ月と変化を見せなかった風景にほんの僅かだが変化が訪れる。その光は男のスピードに合わせ近づき大きくなっていく。

――抜けられるのか……

男はさらにスピードを上げ光を目指した。

光がどんどん近づいてくる。

あと少し……

鬱蒼と茂っている木々の間を走り抜け、男は光の中へ飛び込んでいった。

全身が光に包まれていく。光の暖かさを感じながら、ゴールテープを切るように光のベールを突き抜けると男の目の前に広がったのは周りを杉の木に囲まれた直径１００メートル程の空間であった。

月明かりに照らされたポッカリと空いた空間――

あの光はどこへ行ってしまったのだろう。しかし、男は中に入った途端自然と立ち止まっていた。何故立ち止まっているのだろうか？　いや、男はそれが当たり前のように気にも止めていない。ただわかることは背後

に感じていた殺気は嘘のように消え、暖かなオーラが男を包んでくれているのを感じるのだった。だが、これは本当に安らぎなのだろうか？
恐る恐る後ろを振り向いてみる。やはりそこも高い杉の木が壁のように立ちはだかり、外界からの進入を拒んでいる。もう自分がどこから入ってきたのかもわからない。
「……なんだここは……」
この場所を目指していたのだろうか？　息一つ切らせていない男は、ゆっくりと周りを見渡した。不思議な空間……だがなんとなく見覚えのある空間だった。特に中心に組まれている岩の塊に見覚えがある。
広場の中心にはどのようにして持ち上げられたのか、何枚もの大きな板のような岩が組重ねられ3メートル程の高さになっている。それはなにかの部屋にも見えた。正面には2メートル程の石の扉が閉ざされ、扉の前には朱色の小さな鳥居と祭壇が作られており、祭壇の上には丸い青銅鏡が置かれ月明かりを反射して怪しく輝いている。
古い神様を祭った祠かなにかなのだろうか？
その祭壇を見ていると何故だかここにいてはいけないような気になってきた。人間の第六感が『立ち去れ』と警報を鳴らしている。
しかし、男は吸い寄せられるように祭壇へと近づいていった。
祭壇の前に立つと先程まで感じていた暖かなオーラが急変し、ゾッとするような寒気が全身に襲いかかってきた。
――いやだ……ここにいたくない……
そう思っているのだが、金縛りにあったように祭壇から立ち去ることも目を離すこともできない。
――なんだあれは……

石の扉の中心になにかが埋め込まれている。目をこらしてみるとそれは宝石のようであった。だがどこかおかしい。

その宝石は埋め込まれているにもかかわらず、青白く輝き自ら光を放っているようであった。

――なんだこの石は……どこかで見たような……この形……

宝石は丸い玉に尻尾が生えたような形をしていた。その形……どこかで見た覚えがある。そしてこの鏡にも……

――どこで見たんだ……

記憶が薄いカーテンに隠されている。そのカーテンを捲れば全てがわかるというのに……だが、いくら手を伸ばそうともカーテンを取り払うことはできなかった。

「なにをそんなに深くお考えになっているのですか？」

どこからともなく美しい女の声が聞こえてきた。呪縛を解かれた男は周りを見回してみるが、声の主を見つけることができない。いったいどこから……

「お待ちしておりました大山様。ずいぶんとお時間がかかったではありませぬか」

聞き覚えのある声……それは男を呼び寄せていた声だった。

先程よりも近くに聞こえているというのに声の主の姿を探し出すことができない。

「……どこにいるんだ。俺を呼んでいたのはお前か……」

「はい、ずっと昔から大山様のことをお待ちしておりました」

声が杉の木に反射しエコーが掛かったように響いている。

男は必死で声の主をさがした。

「出てこい……それに俺は大山なんかじゃないぞ」

「フフフッ……まだ思い出しませぬか？　まあそれもいいでしょう」
今度は声の発せられる場所がハッキリとわかった。男は慌てて祭壇に目を移す。声はそこから発せられている。いや、もっと上から……視線を上へ上げるとそこには白い着物に赤い袴、そして白い千早という巫女装束に身を包んだ美しい女が一人、組まれた岩の上に立っていた。いや、女と形容するには少し幼すぎるだろうか、黒い艶やかな長い髪を襟元で白い丈長で留め、毛先は綺麗に揃えられている。少し垂れた大きな目は黒い瞳が印象的で、小振りの小さな鼻、紅をさした唇はふっくらとしている。しかし、神聖なる巫女の姿をしているというのに、少女には何処か淫らな雰囲気が漂っていた。
男を見つめる瞳は優しく、唇から漏れる微笑みは女神のように慈愛に満ちている。少女は一度ゆっくりと瞳を閉じると身を翻し岩を蹴った。そして天女のようにフワリと男の元へと舞い降り、一度男に視線を合わせると頭を下げたのだった。その優雅な身のこなしを男は呆然と見つめていた。
美しい身のこなしに魂まで抜き取られてしまったのではないかと思う程少女から目を離すことができない。
「お久しゅうございます大山様」
深々とお辞儀をした少女は、再び男のことを「大山」と呼んだ。先程否定されたにもかかわらず。
「ち、違う……俺は大山じゃない。それに君とは――」
「会ったことはない」と続けようとした。しかし、少女の微笑みを見ていたら、その言葉が後に続けられなかった。
「良くわたくしを見て下さいまし。なにか思い出されませぬか？」
そんなことを言われても思い出せない。男は何処かで少女と会っているのか？　いや、会ったことはない。会っていたならこれ程の美少女を忘れるわけがないではないか。
もし普通の状況で少女と出会ったのであるならば話を合わせて首を縦に振ったことだろう。それがたとえ夢

の中であったとしても……しかし、男にはそれができなかった。ここで首を縦に振ってしまったらなにか悪いことが起きるような気がしてならなかったのだ。

「いや……君に会ったことはない。きっと人違いだよ……俺は大山じゃない」

「汚れた現し世を彷徨い続けるのは大変だったのでございましょう。よもや自分のお名前すら思い出せぬとは……余程深い記憶の底に埋もれてしまわれているのですね。しかし、思い出して頂かなくてはなりませぬ。わたくしがそのお手伝いをいたしましょう」

ゆっくりと近づいてきた少女は、ジッと男の顔を見つめ続けた。その吸い込まれるような瞳を見ていると思考が霧の奥底に追いやられて行くような気になってくる。

「そんなに堅くならないで下さいまし……わたくしの方が恥ずかしくなってしまいます」

いったいなにをしようと言うのか？　いや、なにをしようとしているのかわかる。だが、どうして……

少女は予想通り男の首を抱くとゆっくりと唇を重ねてきた。

なんと柔らかな唇なのだろう……

唇が触れた瞬間、男の顔は快楽の色に染り男根を硬くさせる。しかも唇から注がれる快楽はそれだけでは収まらない。舌を差し入れ、少女の息吹が注ぎ込まれると快楽は頂点に達し、堅くなった男根からは精液が溢れかえったのだった。

唇を重ねただけで男を絶頂に導くとは……どのようにしたらキスだけで男をイかせることができると言うのだろう。

しかし、男はそれだけのことで今まで感じたことのない快楽に襲われていた。「このままではいけない」頭の片隅で警報が鳴っているにもかかわらず、男は快楽にのめり込んでいった。なおも少女の息吹が注ぎ込まれ続ける。なんと熱い吐息なのだろう、男は更に深い快楽を覚えながら少女の吐息を飲み込んでいく。すると頭の

中に突風が吹き荒れた。先程いくら手を伸ばしても取り除くことができなかった記憶のカーテンが一瞬にして吹き飛ばされ、隠れていた記憶が姿を表した。

過去の記憶が甦ってくる。いや、前世の記憶……もっと昔の記憶まで……

——な、なんだ。これは………なに、この女は……

男は慌てて少女の躰を突き飛ばした。輪廻が始まる前、肉体を初めて持った時の記憶が少女の顔を覚えていたのだ。

「お、お前は……」

次の言葉が出てこない。男の顔には先程の快楽など一片も残っておらず、ただ恐怖の色に染まっていた。

「思い出されましたか大山様。わたくしのことを……皆で弄んだ女のことを……わたくしの躰はさぞ美味でございましたでしょう。何度も何度も貴方様はわたくしの中に精を放ち続けたのですから」

少女の瞳が怪しく輝いた。自らが犯される姿を思い出して恍惚に微笑んでいる。しかし、その悦楽の表情を見ても男の顔からは恐怖を取り払うことはできなかった。

そんな男を見て少女は優しく微笑みかける。

「そんなに恐れることはありません。あれはもう遠い昔のこと……その様なことを咎めるつもりもございません。わたくしも初めて肉の喜びを教えて頂いたのですから……そのお礼をしたいと思い参上致しましただけでございます」

「な、なにをたくらんでおる……今更お前になにができると言うのだ」

男の顔からはどんどん血の気が引いていき、今は完全に蒼白になっている。

「なにができるかでございますか？　色々なことができます。そのためにわたくしは生き続けてきたのですから……堕落したあなた方とは違い、転生などせずにたった一人この世界で……」

穏やかな表情は全く変わらぬというのに醸し出すオーラが変わった。

赤から青へ……

暖から冷へ……

「なにをしようと言うのだ。これは変えられないことなのだ。我々が封………まさか貴様、それを開こうと言うのではあるまいな。ならん、ならんぞ！　そんなことは許されてはならん！　この世を再び闇に落とそうと言うのか！」

目が血走り、より恐怖の色が濃くなっていく。

「そうでございましょう。あなた方にとっては許されるはずもないこと……しかし闇は既にあなた方の心の内に潜んでおりました。わたくしを犯し、あのお方を生け贄に捧げた時から……」

少女は組み上げられた岩を指差し不適な笑みを浮かべていた。

「封印は解かれつつあります。さぁ、あなたが身に納めている鍵もお渡しなさいませ。初めてのおなごを弄んだ代金は高(た)こうございます。その代金をあなた様のお命で……それが大山咋(おおやまくいのかみ)神様の運命なのですから……」

「いつまで戯言を言っておる！」

大山咋神の顔が恐怖から鬼の顔に変貌した。いや、躰までもが大きく膨れあがり2メートルを越そうとしている。にもかかわらず少女は眉一つ動かさない。それどころか微笑みまで浮かべていた。

圧倒的力の差がありそうに見えるが、大山咋神は一歩も動くことができなかった。少女の殺気が大山咋神の動きを止めているのだ。

「いかがなされました？　一人ではなにもできませぬか」

「お、お前ごときが儂に勝てるとでも思っておるのか！」

「フフフッ……それにしては躰を震わせておられるご様子。大山咋神様もお気づきのはず。自らの力が弱って

いることに……何ヶ月もかけてゆっくりと罠にかかっていたことに……そう、今の大山咋神様にはわたくしを倒す力など残っておりませぬ」
そう言うと少女は祭壇に置かれていた鏡を手にした。
「お前ごときが使えるわけが……」
「お甘いことを……すでにこの鏡はわたくしの意のままにございます」
鏡を大山咋神にかざし、少女の目が赤く輝き出すと鏡からはまばゆい光が発せられた。
「そ、そんな……そんなバカな……」
輝いた光が大山咋神を包んでいく。それは一瞬の出来事であった。光が躰を包んだかと思うと躰の内に吸い込まれ、今度は内側から輝き始める。
「ウオオォォ……」
苦しみだした大山咋神の皮膚がひび割れ、剥がれ落ち、光が溢れていく。
「おのれぇぇ……だが、儂を倒したところで……まだ強き力を持った神々が封印を守っておるわ！　お前のたくらみなど……成就する……わけ……も……うぎゃあぁぁぁぁ……」
光が内側から一気に膨らみ飛び散った。光の破片は雪のように降り注ぎキラキラと輝きながら少女に降り注ぐ。なんと美しい光景だろうか、まるで星々が少女の美しさを妬み舞っているようであった。
少女はジッと男が立っていた場所を見つめている。そこには小さな青白い炎が宙に揺らめいていた。ちょうど大山咋神の心臓があった場所に……
「汚らわしき心を持った者程美しい色で燃えるとは、なんの因果でございましょうか」
うっとりと炎を見つめ薄い笑みを漏らす。
「これでまた一つ……」

フウゥゥゥ……

蝋燭を消すように一吹きすると美しい炎は消え、炎の中から黒く輝く勾玉が姿を現したのだった。